

2) 藤田和生・渡辺邦夫・Tri Heru Widarto & Bambang Suryobroto (1995) スラウェシマカクの種の認知(2) -ニグラとニグレスセンスについて. 第11回日本霊長類学会 (1995年6月, 犬山, 愛知). 霊長類研究, 11(3): 285.

サル類保健飼育管理施設

小嶋祥三(施設長・兼)・松林清明・
後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾・
三輪宣勝²⁾・熊崎清則²⁾・阿部政光²⁾・
釜中慶郎²⁾・前田典彦²⁾・高橋末年²⁾・³⁾・

平成7年度の施設の概要は以下のようであった。

- 1) 所内全てのサルの飼育管理一元化が実施された。研究所創設以来、部門に配分された実験用のサルの飼育は各部門に委嘱されてきたが、土・日曜や祝日のケアも全て施設の手で行うことにより、サル健康面のチェックや動物福祉上の配慮が同一レベルでできるようになった。このためには飼育要員の増加が必要であったが、退職した総長発令職員の人件費を充てることにより、予算の増加を伴わずに実施することができた。一元化によって各部門はケアの労力が不必要になり、当施設の設定目的のひとつである実験用サルの全面管理が名実ともに実現したことになる。動物の飼育環境改善の一部として、土・日・祝日もケージ室の清掃を行うことも実施に移された。飼育内容を充実させる意味において、画期的な年であったといえる。
- 2) 施設の改組(実験動物センターへの転換)の概算要求が、初めて要求重点事項の中に取り入れられた。教・技官の増、飼育外部委託費、建物未完成部分の増築という内容であるが、サル施設設立以来最初の改組要求であり、施設の発展のために早期の実現が望まれる。
- 3) COE招聘外国人研究員として、朱本仁(上海動物園)が2月に着任し、8月までの予定で類人猿人工繁殖の研究を行っている。
- 4) 1996年元日の朝、第二放飼場グループケージの鉄格子の一部が何者かによって破られ、ニホンザル6頭が外に出るといった事件が起きた。警察で捜査中であるが、類似の事件の再発を防ぐため、高圧電気柵や監視カメラの増設をはじめ、

夜間の警備体制の強化など、防犯に努力している。

研究概要

A) サル類の生殖生物学的研究

松林清明

オス生殖機能の比較研究のひとつとして、類人猿やマカクの精巣の組織学的検索を進めている。1996年2~3月にインドネシア国ポゴール農科大保有の各種から、バイオプシーによる材料採取をおこなった。

B) 実験用サルの動物福祉の研究

松林清明

実験動物の適正なケージサイズに関する日本案の一部としてサルを担当し、欧米の各ガイドライン作製担当者とのディスカッションのため、アメリカ・ヨーロッパを訪問して意見を聞き、最終案をまとめた。

C) サル類の寄生虫に関する研究

後藤俊二

サル類における線虫類の感染動態を明らかにするとともに、肺糸状虫症の実験モデル作出を目的として、ニホンザルへの糸状虫の実験感染をおこなった。感染経過に伴う血液性状やIgG抗体の変動、肺病巣の形成等についてヒトや他の動物との比較検討をおこなった。

また、野生カニクイザルやスラウェシマカクにおける寄生虫相と、その宿主に与える影響について調査を進めている。

D) サル類の成長の生理学的及び形態学的研究

鈴木樹理

サル類の成長ホルモンの分泌動態を明らかにするために、ニホンザルについて、連続採血と採尿をおこなった。成長ホルモンはメスで性成熟時に連動して高くなる傾向があり、特に最大パルスの濃度で著しいことなどが明らかになった。縦断的な生体計測も継続しておこなった。

1) 教務職員、2) 技官、3) 1996年3月末日定年退職

E) サル類のストレス定量のための基礎的研究

鈴木樹理

日常的にサル類に負荷されている様々なストレスを定量するための基礎研究として、無麻酔採血並びに無麻酔経口投与時の血中成長ホルモン濃度の変化を、ニホンザルを用いて調べた。その結果、これらの負荷ストレスに対する感受性及び反応には個体差が大きいことなどが示唆された。

報告その他

-和文-

- 1) 松林清明 (1996) : 実験用サル類の飼育条件における動物福祉の実証的研究. 文部省科学研究研究費補助金 (一般C) 報告書.
- 2) 松林清明 (1996) 実験動物の保管管理設備・機器等の適正化-サル類-. 文部省科学研究費補助金 (総合A、代表 佐藤徳光) 報告書.

-英文-

- 1) Matsubayashi K. (1996) A study on the cage size for experimental animals - Non-human primates - . Report of Monbusho International Scientific Program. Head investigator: N. L. Sato).

学会発表等

- 1) 藤井智代子・藤沢道子・和田知子・奥宮清人・松林公蔵・松林清明・松沢哲郎 (1995) ニホンザルにおける加齢と歩行パターン. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.
- 2) 藤沢道子・藤井智代子・和田知子・奥宮清人・松林公蔵・松林清明 (1995) ニホンザルの

ケタミン麻酔下における非観血的測定法による血圧と加齢の関係. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.

- 3) 松林清明・榎本知郎・中野まゆみ・長戸康和 (1995) ミドリザルとバタスモンキーとの風間雑種の精巣組織像所見. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.
- 4) 長戸康和・榎本知郎・松林清明 (1995) 老齢オスニホンザルの精巣組織の形態-光顕と電顕による対比観察. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.
- 5) 中野まゆみ・榎本知郎・松林清明・長戸康和 (1995) ニホンザルの精上皮における異常な精子形成細胞について. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.
- 6) 橋祐司・小林正規・松林伸子・松林清明 (1995) サルから検出された赤痢アメーバの病原性について. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 281.
- 7) 柳原芳美・松林清明・松沢哲郎 (1995) ニホンザルにおける飼育環境のエンリッチメント-指迷路餌箱の検討. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 282.
- 8) 鈴木樹理 (1995) ニホンザルの成長期における血中成長ホルモンの分泌動態. 第11回日本霊長類学会大会 (1995年6月、犬山). 霊長類研究, 11(3): 290.

1995年度（平成7年度）サル類動態表

種名	増加 出 産	死亡									
		実 験 殺	呼 吸 器 系 疾 患	消 化 器 系 疾 患	栄 養 代 謝 器 系	泌 尿 生 殖 器 系	感 染 症	外 傷 死	そ の 他 の 疾 患	管 理 失 宜	剖 検 不 能 等
コモンツバイ									1		
ワオキツネザル			1								
ワタボウシタマリン	6	2					1	1			
コモンマーモセット	20	2						4	1	3	
ヨザル	1										
フサオマキザル	2										
ニホンザル	39	25	5	4		1			1	2	
アカゲザル	43	29	2	4		1	2	1	1	3	
タイワンザル	2	1	1						2		
カニクイザル	4	4				1					
ボンネットザル	3	3			1						
ベニガオザル		1									
マントヒヒ	2										
小計	122	67	9	8	1	2	4	6	6	2	
合計	122	113									

注) (増加頭数) (減少頭数) 差引頭数
122 - 113 = 9 (増加)

1995年度（平成7年度）末飼育頭数

種名	頭数	種名	頭数	種名	頭数
ワオキツネザル	2	ケナガクモザル	1	ベニガオザル	1
オオガラゴ	1	ミドリザル	5	ボンネットザル	13
コモンマーモセット	37	パタスザル	1	カニクイザル	55
ワタボウシタマリン	22	ミドリサル×ハタスザル	2	セレベスマカク	2
ヨザル	12	ニホンザル	342	マントヒヒ	9
リスザル	3	アカゲザル	238	シロテテナガザル	2
フサオマキザル	16	タイワンザル	13	アジルテナガザル	2
チュウベイクモザル	1	ブタオザル	2	チンパンジー	10
				合計	792